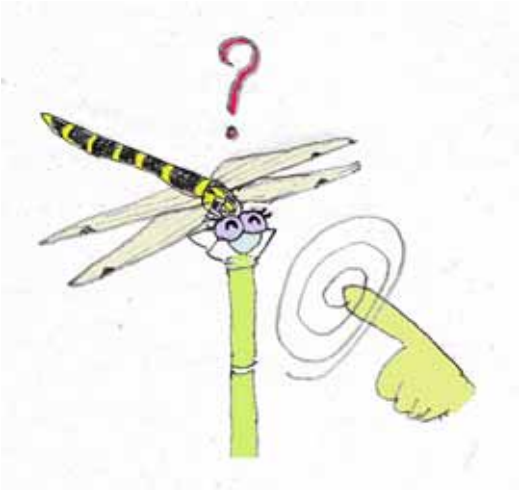
－身近な益虫たち－

① トンボ

地球上に生息する生物のなかで地球の役に立っていないものはいないでしょう。人類でさえ、一つくらいは役に立っていることもあるはずです（？）。益虫や害虫などという区別は、現在地球でたまたま最も繁栄している Homo sapiens の都合のいい言い方にすぎませんが、ここでは我々人類が益虫と呼んでいるいくつかの虫について紹介していきたいと思います。



トンボは空を飛びながらその大きな目で他の昆虫類を見つけると、強い飛翔力で近づき、脚をカゴ状にして相手を捕まえ、食べてしまいます。トンボの捕食量を把握するのはなかなか難しく、詳しいことはわかっていませんが、あれだけの飛翔力を支えるためにはかなりの量の昆虫類を食べていると考えられます。飼育してみると、ギンヤンマでは一日あたりでハエ類なら 10 匹くらいを食べるようです。昔からトンボは水田の上空などを飛び回り、また、その幼虫であるヤゴも、水田の中で親と同様に小昆虫や小動物を食べていることから、田んぼなどに生息する害虫を食べる益虫と考えられています。

トンボの名前の由来は「飛ぶ棒」が変化したという説が一般的ですが、和語同士が結びついた「飛ぶ羽」が変化したとも考えられています。大型のトンボの総称である「ヤンマ」は、美しい羽の意である「恵無波（えんば）」が転じたとも言われていますが、どちらも定説はありません。西洋では、英名でトンボは「Dragonfly」と言い、悪魔の使いなどと考えられており、あまり愛すべき存在では無かったようです。

日本ではトンボは昔から子供たちになじみの深い虫でした。夏の夕方になると彼らはトンボ採りのために、メスを使ったおとり法や、小石を両端に結わえたひもを投げあげて絡め取る方法など、いろいろな方法を駆使してトンボ捕りに熱中しました。止まっているトンボの前で大きな円を指先で描きながら近づき、目を回させて「えいっ」と捕まえる方法は有名ですが、この方法で実際にトンボを採るのに成功した人はあまりいないようです。

（淡路農業技術センター農業部　二井清友）